

<<招待発表>> (9月23日 13:45-14:15)

【K棟104】

消滅危機言語，宮古口のエスノグラフィー
—学校と集落のフィールドワーク調査の記録—

藤田ラウンド 幸世（国際基督教大学）

ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）は2009年にインターネット上の世界危機言語地図を公開し、そこには日本国内の消滅危機言語として8言語（アイヌ語，八丈語，国頭語，沖縄語，宮古語，八重山語，与那国語）が記載されている。本発表は，沖縄県宮古島市の一つの集落の中学校で行った中学生への縦断インタビューと質問紙調査，また中学生が親や祖父母と暮らす集落でのフィールドワーク調査から宮古口（みゃーくふつ＝宮古語で宮古のことば）への意識をエスノグラフィーという形で記述を試みる。初めの研究目的は，宮古口の現状がどの程度の危機にあるのか，その言語使用を調べることであったが，先行研究から想定していた宮古口母語話者は60歳代ではなく，実際にこの集落では80，90歳代だと考えられるなど，この集落を取り巻くグローバルな変化が陰影として言語話者にも影響を与えている。宮古口のマクロとミクロの文脈を調査する上での記録方法も考えたい。

<<招待発表>> (9月23日 13:45-14:15)

【K棟203】

海を渡った広島方言
—海外日系移民社会における方言の継承と変容—

中東 靖恵 (岡山大学)

広島県は全国一移民を輩出した移民県として知られ、今年移民150周年を迎えたハワイの日本語には広島方言が大きく影響した。南米パラグアイには戦後広島県から集団移住が行われたが、海を渡った広島方言はどのように継承され変容しているのか。パラグアイ日系社会に暮らす広島県人家族を対象にアクセント調査を行ったところ、移民1世の広島方言の伝統的アクセントは、その子・孫世代にもよく継承されている一方で、世代の変動も見られ、その多くが日本国内の広島方言で見られる共通語化と同じアクセント変動であった。日系移住地のインフラ整備や日本との人的交流の活発化、日本語教育環境の充実、メディアを通じての「日本の日本語」との日常的接触は、移住地の日本語環境に大きな変化をもたらし、日本語の新しいアクセントの獲得に寄与した。近年のSNSの普及による日本の日本語との接触は、スペイン語への言語シフトとともに、今後注目される新たな動きである。

<<招待発表>> (9月23日 13:45-14:15)

【L棟102】

PythonとTwitterAPIによるビッグデータ事始め

荒川 歩 (武蔵野美術大学)

近年、ビッグデータに対する関心が高まっている、SNSにある大量の言語データは、位置情報など他の情報や時間情報と結びついているものもあり、社会言語科学にとっても有用なビッグデータの1つであるが、大量のデータを処理するには、なんらかのプログラム言語の修得を必要とするために、ビッグデータへの参入にハードルが高いと感じる研究者は少なくない。そこで、本発表では、よそおいに関する表現の時間的変遷の分析を例に、PythonとTwitterAPIによるデータ収集の方法を紹介する。発表者自身もビッグデータを専門とするわけではないが、ここしばらく挑戦してきたなかで経験した困った点などについても紹介することを通して、一からビッグデータにチャレンジしたいと考えている人の一助になればと考えている。